

長沼小学校における防災・減災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立長沼小学校

1 はじめに

長沼小学校は、長野市の北東にあり千曲川沿いに位置する、全校児童 87 名の小規模校である。

2019 年（令和元年）の台風 19 号による千曲川の氾濫によって被災した。2020 年は、学校の立て直しと児童の心のケアに努めた 1 年間であったが、復旧がほぼ済んだ 2021 年（令和 3 年度）は防災・減災学習を充実させていこうと考え、本事業の活用を申請した。

2 長沼小学校の以前の防災体制について（概要）

もともと長沼地区は地震の災害や水害の歴史があったため、小学校での避難訓練の他に 4 年生以上が地域の防災訓練に参加していた。長沼体育館へ避難し、煙体験や放水訓練の見学、消火器・バケツリレー体験、非常食体験等を毎年行っていた。

長沼地区は昔から水害との闘いの歴史を繰り返していた。地域の学習で水害について調べたり、戌の満水の水位を表した標柱を見学したりしていた。また、堤防強化の目的で桜堤を造る事業があつたため、平成 26 年度卒業の児童が桜堤という歌劇を作り発表した経過もある。劇中歌「桜づつみ」は、水害と闘ってきた歴史を知り、私たちの暮らしを桜堤が守ってくれる希望の歌として平成 31 年（令和元年）まで歌い継いでいた。

このような歴史を学んできていたので、大災害に遭っても児童は全員無事であったが、学校の防災体制や今までの学習では不十分であることが明らかとなった。

3 学校防災アドバイザーの関わり

本格的な防災・減災教育の取り掛かり方、目指す方向性について専門的な見地から指導が欲しかった。信州大学の廣内教授には、長沼小学校に来校していただき、防災・減災学習の考え方を指導していただきたり、他校での実践例を教わったりした。水害のアーカイブをとる協力もさせていただいた。このアーカイブは、蓄積して防災管理にも、防災教育にも使っていけることを教わった。

また、防災・減災教育に取り組んでいる清野小学校、信里小学校、加茂小学校、西部中学校、飯綱中学校、豊野西小学校、豊野東小学校などの学校も紹介していただいた。このうち、清野小学校については Zoom での学習発表のタイミングを教えていただき、職員や当時 4 年生の児童が視聴した。

○廣内教授の指導より

防災・減災教育といつても大上段に構えるのではなく、取り組みやすいことから始めること。ベストでなくてベターでいいので、楽しく繰り返せることが大事。防災学習には、正解がない。そういう地域に住んでいて、いざとなったらどうするかを考える力をつけていきましょう。「Field O

n！」というソフトは、位置情報と写真やコメントが地図上にプロットできる。そしてこれを集約したものを使ってすぐに発表もできる。普通は「災害とは何か」から学習をスタートするが、「Field On！」を使えば、自分たちの地域は何が危険なのか、どこが危ないのかを把握するところから始められる。危ない場所があるなら、逃げ道は？逃げ場所は？何のためにやる？→大切なものを守るために。そのための道筋を自分たちで考えていく。ディスカッションをすることがとても大事。また、学習の先に、タイムラインの学習があるかもしれない。タイムラインは、「大丈夫だろう、と思ってしまう人間の心」に強制的にトリガーをひく仕組みを作るものである。

- 夏には、ドウチュウウブの落合さん、信州大学の附属次世代型学び研究開発センター技術補佐員の倉澤巖さんらに「Field On！」のインストールと使い方のインストラクションをしていただいた。

本校は、各学年初年度であり、被災して間もないで、児童の心情に配慮し、できるところから取り組みを開始した。

○1・2・3年生は、日赤の防災・減災教育カリキュラムを受講し、地震の時にどうやって身を守るかを学習した。

○4・5・6年生は、自分たちの教科の学習からスタートし、自分たちの地域の実際を教わった「Field On！」で調べたり、防災に関する設備を調べて回ったりした。理科の自然災害の学習から発展した、地震や火山の災害についても調べた。

○5・6年生は、実際に避難する時のことを考えて必要なもの、必要なことを話し合った。6年生はこれらをもとにマイ・タイムラインの作成に取り組んだ。

○10月13日長沼防災の日には、これらの学習の成果を全校で発表しあう会をもった。それに学んだことを発表しあった。

○12月には、SEEDS Asia様主催のオンラインイベント「マイホームタウン」に6年生が参加させていただき、宮城県、三重県の小学校、バングラデシュ、インド、ミャンマー、フィリピンの小学校と英語を使ったり、通訳の力をかりたりして自分たちの町や被災の様子、対策、取り組みについて情報交換をした。

○職員も、被災当時の経験や反省からスタートし、長沼小学校のタイムラインを作成した。市の危機管理防災課や長沼地区の防災安全部会長に講師になっていただき、千曲川の流域タイムラインや長沼地区のコミュニティータイムラインと連動したタイムラインとなっている。

4 まとめ

19号災害で大変な経験をしたが、前に向かって歩み始めることができた。地域を理解し、いざというときに行動できる力を持つ学習が動き始めた。今後は、地域と共にこの学習や取り組みを進めていきたい。

(文責 教頭：丑澤 智成)



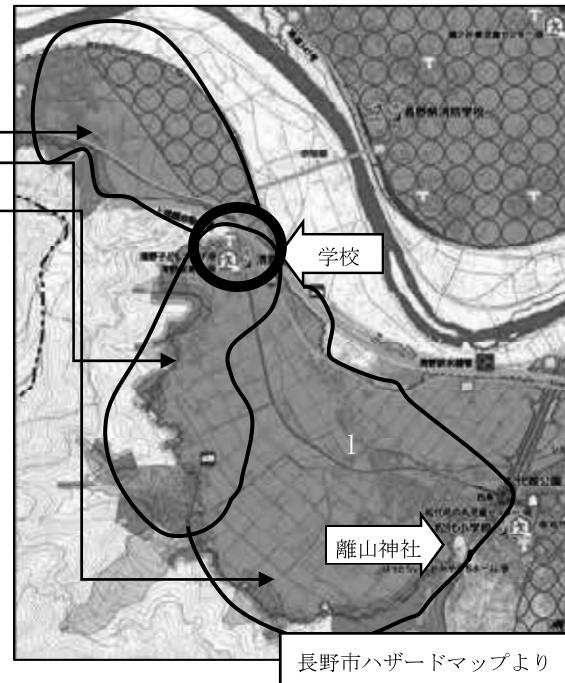
学校安全総合支援事業の取組について
5学年：「清野の土砂災害について調べよう」（総合的な学習の時間）
3学年：「雨がたくさん降ったらどうしよう（清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ）」（総合的な学習の時間）

長野市立清野小学校

1 はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する1区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる2区、学校東側で大部分は平地部の3区（ともに松代町清野地区）の3地区に分かれている。児童数は39名で、徒歩で集団登下校をしている。

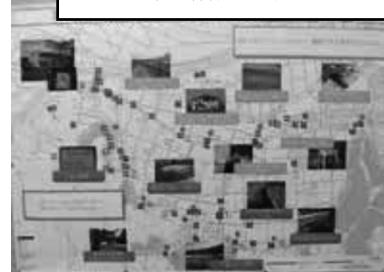
学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで5～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。令和元年の台風19号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難した。



2 本校の防災学習のこれまで

令和元年度、4年生の児童が、総合的な学習の時間を利用して、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末にインストールされた防災教育用アプリ（『フィールドオン』）を利用した。危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。令和2年度は3年生が「洪水が起きたときの行動を考えよう」の学習に取り組み、進級した5年生は防災マップ作製を目指し、再びフィールドワークを行った。前年度は水が流れることを意識して水路に目を向ける子どもが多くいたが、フィールドワークを重ねるうちに、浸水により見えなくなった時の状況を考えて写真を撮る子どもが出始めた。過去の出来事だった浸水被害を、今現在の自分の問題として考えようと意識の変化が見られた。地域や県内外に向け報告会をZoomで行った。

令和2年度作成した防災マップ



3 本年度の取り組みについて

(1)清野の土砂災害について調べよう（5年生）

①ねらい

- ・土砂災害発生時、清野地区の危険なところはどこなのか、実際に地区を歩いて自分の目で確認する。

②活動の概要

- ・廣内先生（信州大学教育学部教授）の研究室の協力により、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用する。
- ・長野市土砂災害ハザードマップとともに、清野地区の土砂災害警戒区域がどこであるのかを実際に歩いて確認し、タブレット端末で現地の写真を撮影する。

長野市ハザードマップ分類	
土砂災害警戒区域	土砂災害の恐れがある区域 (イエローゾーン)
土砂災害特別警戒区域	土砂災害警戒区域のうち、建築物に損壊が生じ、住民に著しい危険が生ずる恐れがある区域（レッドゾーン）



タブレットを操作する児童

③児童の様子

昨年度、防災学習を行った4年生と6年生の話しを聞いたり、資料を見たりした。昨年度は川の氾濫による水害について学習を進めたことが分り、今年度は土砂災害について学習を進めていくことにした。長野市の土砂災害ハザードマップとともに、清野地区でどのあたりに被害がありそうか確認をした後、1区⇒2区⇒3区の順で3回に分けてフィールドワークを行った。

【1区】

- ・山側の道路くらいまでがレッドゾーンだということが分かった。レッドゾーンは少ないけれど、イエローゾーンは多かった。

【2区】

- ・赤いところ（レッドゾーン）は、山が崖っぽくなっていたり山の形が丸くなっていたり、線路があったりしているということがわかりました。山の高さが高い程黄色の場所が長いことに気がつきました。



- ・1区より2区の方が黄色や赤が多いということもわかりました。私の家も黄色ゾーンに入っているのでしっかりと準備をしておきたいです。
- ・レッドゾーンとイエローゾーンの境には柵があるところが多かった。
- ・2区は黄色が多くて、自分の家や近所の家も黄色ゾーンに入っていた。

【3区】

- ・3区は、1区や2区よりも土砂崩れや崖崩れの危険性が少なかった。離山（はなれ

やま) 神社が土砂崩れや崖崩れの危険性がないとわかった。

- ・(航空写真で見ると山が続いているように見えた) こ_こは赤なのに、となりのここはなん_ど何もない(赤にも黄色にもなっていない) のだろう、と思_つていました。実際行ってみたら、他の所と違_つて、低くて木が生えていて、緑っぽく見えていたんだなと思_ついました。

【感想】

- ・赤い場所は、石みたいなものでできていたり、斜めになっていたり、まるっぽく斜めになっているような場所だとわかりました。地図だけじゃわからない事を近くに行って、調べられてよかったです。
- ・地図では山のように見えたものも、実際に見たら、山では無いところもあった。意外と山から離れた場所でイエローゾーンが終わっていた。



④まとめ

- ・フィールドワークで現地に行って、その場に立ってみるとタブレット上の防災マップと感じ方が違うことに気づいた子どもたちは、今自分が住んでいる地域の土砂災害についてしっかりとと考えるようになった。現地に足を運んで学んだ土砂災害の学習が、家族の避難を含めた地区の防災について考えるきっかけとなった。

(2)雨がたくさん降ったらどうしよう。(清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ) (3年生)

①ねらい

- ・洪水発生時に清野地区にいた場合、避難するための安全な場所と危険な場所をハザードマップで予想し、実際に地区を歩いて自分の目で確認する。

②活動の概要

- ・廣内先生(信州大学教育学部教授)の研究室の協力により、タブレット端末と防災教育用アプリ『フィールドオン』を利用。
- ・アプリを使用し、タブレット端末で撮った写真をそのまま地図上に表示したり、自分たちがいる場所にハザードマップを重ね合わせて危険性を確認したりし、写真に合わせたコメントを残す。
- ・立体地図で安全だと自分が感じた場所を確認し、洪水時の避難の仕方を考える。



③調査報告

- ・洪水は身近だが「自分の家は大丈夫だろう」という児童が大半であった。しかし洪水ハザードマップをみると、清野地区のほとんどが危険区域であることがわかった。
- ・岩野地区は過去に大きな被害が何度かあったことを児童は知っていた。洪水の原因について千曲川がすぐ近くで川の曲がり角にあるため、被害が多くあったのだと思った。

- ・各地区や学校に「防災倉庫」や「土のう」があることに気がついた。地区の方々が防災に備えて用意していることを感じることができた。
- ・実際の立体模型をみる機会があり、安全だと思ったところの高さを、実際に見たりさわったりして確認することができた。

④児童の感想

3Dプリンタで出力した立体模型



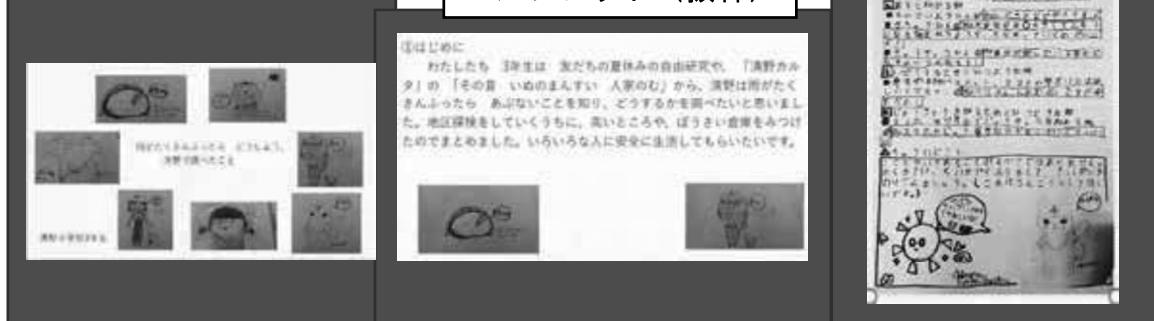
- ・自分の家は大丈夫だと思っていたけれど、地図をみると危ないことがわかった。離れ山の防災倉庫は最近置いたばかりだとわかり、そこに食べ物があるからびっくりした。もし災害があったときにあわてず離れ山に避難すれば大丈夫だと思った。

⑤まとめ

- ・タブレットを見て学ぶだけでなく、実際に歩くことで土地の高低を感じ、危険な場所を感じ取ることができた。
- ・学習を行う前は、「自分の家は被害を受けないだろう」とぼんやりと考えていた子どもたちであったが、ハザードマップが赤に塗りつぶされているのを見て、「洪水になれば自分の家は水につかってしまう」ことを知り、大変驚いていた。
- ・「洪水になった場合はどこ逃げればよいか。」自分たちが学んで感じたことや考えたことをわかってもらおうと考えてパンフレットにまとめた。保護者や地域の方に配布して、地域の防災の意識を高めたい。



パンフレット（抜粋）



終わりに

3年目の実践だが、5年生は上級生に話を聞いたり資料を見て学んだりして、まだ調べていない「土砂災害」に関する取り組みへと広げていくことができた。現地に行ってその場所に立つことで感じたことをまとめるだけでなく、地域の方々に学んで感じたことを広めようとする姿が見られるようになった。3年生は洪水発生時に自分や家族はどこに避難するのが適切かと考えることができた。そして、「避難するための準備」などに意識を向け、自分のこととして考えることができた。

これらは、今までの取り組みの積み重ねがあり、清野小学校の子どもたちの防災に対する意識が大きくなっているからだと感じている。

(文責 教諭 笠原 健 講師 宮沢 千佳)

豊野中学校における防災教育の充実に向けた取組について

— 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

長野市立豊野中学校

1 はじめに

本校は、昭和 32 年に開校し、今年度で 65 年を迎える歴史ある学校である。旧豊野町から、平成 17 年の市町村合併を経て、長野市立豊野中学校となった。また、平成 23 年には新校舎を建てたが、令和元年の台風 19 号の浸水被害を受け、校舎および体育館の 1 階部分をすべて改築した。

学校目標を「よく見、よく聞き、深く考え、進んで実践する生徒を育てる」と据え、目指す生徒の姿を「向上心を持ち、粘り強く努力する生徒」「自分の考えを持ち、豊かに自己表現する生徒」「校風や伝統に誇りを持つ生徒」「互いの良さを認め、ともに磨き合う生徒」として教育活動に取り組んでいる。生徒数は、現在 234 名、学級数 11(内特別支援学級 2) の小規模校である。教育活動の特色としては、「挨拶」「ノーチャイム 2 分前着席」「無言膝つき清掃」を誇りにしながら、人権同和教育や生徒会による地域貢献活動に力を入れて取り組んでいる。

2 長野市立豊野中学校の防災教育について

<被災前>

多くの学校で行われているように、本校における防災学習は、年に 3 回実施される避難訓練を中心であった。その内容は、4 月に「避難経路と避難場所を確認することを目的とし、火災を想定した訓練」、9 月に「地震を想定した訓練」、11 月に「地震を想定した休み時間における訓練」であり、避難後の活動はいずれも、点呼、安全確認、校長による講評という流れであった。

<被災後>

令和 2 年度は、「集中豪雨・土砂災害などに起因する洪水予測に際し、学校からの待避を選択しない（できない）状況を想定し、保護者に引き渡すまでの生徒の安全確保の方法を確認する」訓練を、災害が起きた 10 月 13 日に実施した。また、訓練に伴い防災旬間を位置付け、各学級における防災タイムラインの作成や豊野地区の水害の歴史に関する講演会などを開き、学習を深めた。避難訓練においては、1 階部分が浸水し、やむなく垂直避難をして一夜を学校で過ごすことを想定し、実際に避難物資の運搬や、待機場所となる各教室からの避難状況の報告などを行なった。そして、避難開始から 1 時間後に保護者への引き渡しを実施した。しかし、迎えに来た保護者に生徒を引き渡す段階で、連絡系統がスムーズに機能しなかったため、車の渋滞を引き起こし多くの保護者にご迷惑をおかけす



車の渋滞が起きて混乱をした R 2 年度の引き渡し訓練

る結果となった。

そこで、令和3年度は、より現実的な避難に焦点を当て、「午後から雨量が増し、浅川や千曲川が危険水位に達する可能性が高いことが考えられるため、授業を午前中で切り上げ、下校時刻を早める」ことを想定した訓練を実施した。保護者への引き渡しについては、上記の想定を事前に保護者に伝え、迎えに来るか来ないかを家庭ごとに決めてもらった。また、引き渡しの際に使用する「引き渡しカード」も事前に準備し、迎えに来る可能性のある人を、3人まで記入してもらい、回収しておいた。車による迎えは、50家庭ほどが希望したため、保護者のための駐車場を確保して対応した。当日は、大きな混乱もなく、スムーズな受け渡しが実現した。また、本年度新たに購入した「防災学習ノート」を利用した防災教育も実施した。



カードを確認しながら保護者に引き渡す様子（R3年度）

3 学校防災アドバイザーの関わり

アドバイザーの方には、2年間実施してきた水害を想定した避難訓練の様子を伝え、訓練の内容や保護者への引き渡し方などについてアドバイスをいただくとともに、12月に職員研修会を位置付けて、今後の防災教育において大切にしていきたいことなどをお話しㄧただこうと考えた。

当日は、信州大学教授の廣内先生と特任助教の内山先生にご来校いただき、他校の防災学習の実践や、防災アプリを活用した実践を紹介していただいた。本校の訓練においては、特に本年度の取組について、より現実的な訓練になっていることや引き渡しカードの活用について一定の評価をいただいた。しかし、避難を開始する目安（基準）がやや曖昧であることが指摘された。「浅川や千曲川の水位が○cmになったら授業を取りやめる」「県や市から出される警戒レベルが“3”になったら授業を取りやめる」など、判断の基準となる数値は具体化しておくことと、一つではなく複数用意しておくことが大切であるとご指導いただいた。

4 事業の成果及び今後の課題

廣内先生からは、東日本大震災の教訓を生かして「最悪を想定して最善の策を考える」とお話をいただいた。その中で、訓練にリアリティを持たせるために、防火扉を閉めてみることなど、他校の実践から本校にも生かせそうな手立てを、具体的に示していただいた。本年度、初めて本事業を活用させていただき、専門家のご意見をうかがうことで、私たちの防災教育を見直す機会をいただいた。

来年度は、豊野地区の三校の小中学校で、連携した保護者引き渡し訓練を実施する予定である。引き続き、廣内先生、内山先生にアドバイスをいただきながら、豊野地区全体の防災教育を充実させていきたいと考えている。

(文責 教頭 鈴木 大三)

学校防災アドバイザー派遣・活用事業による防災教育の改善

— 令和元年19号台風の被災経験を活かした「わが家のタイムライン」作成 —

長野市立豊野東小学校

1 はじめに

豊野東小学校は長野市北部にある全校児童 149 名の単級の学校である。本校の近隣には千曲川や鳥居川、浅川が流れ、台風などの大雨で河川が氾濫すると浸水被害が発生することもある。一昨年（令和元年）10月 13 日（日）の台風 19 号による千曲川の氾濫の際は、学校自体に浸水等の被害はなかったものの、学区内では数軒の児童の家庭が床上・床下浸水の被害を受けた。また広範囲に出された避難指示によって本校体育館も避難所となり、多くの被災者が 2 ヶ月ほど避難生活を送ることとなった。

この災害を受け、昨年度「学校防災アドバイザー派遣・活用事業」によって、本校では水害時の引き渡し訓練の見直しと、子どもたちや職員への防災の知識・理解・技能の向上について、学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）にご指導をいただくことができた。また豊野地区 3 校（豊野中・豊野西小・豊野東小）や地区住民自治協議との連携の大切さが確認された。

そこで今年度は、子ども一人ひとりがハザードマップを見て自分の家の周辺の実態を知るとともに、いざというときの行動指針（タイムライン）について学び、災害に備える意識と具体的な方法を理解することを目的にした防災教育を計画した。その中で、学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）から次の点をご指導いただき、子ども一人ひとりの防災意識を高めることと、地域連携について具体化に向けた見通しを持ちたいと考えた。

- (1) 子どもおよび職員の、災害や防災についての知識・理解の向上
- (2) 子ども一人ひとり「わが家の防災タイムライン」の作成
- (3) 豊野地区 3 校および地区住民自治協議会との連携

2 今年度の防災教育の取り組み

- (1) 子どもおよび職員の、災害や防災についての知識・理解の向上
① 7月 6 日（火）・13 日（火）に地区住民自治協議会職員と豊野地区災害復興ボランティアに来校いただき、3～6 年生が一人ひとりタブレットを使って、長野市のハザードマップから自分の家の周辺の様子を知った。また一昨年の台風 19 号災害の避難所の様子などを改めて振り返った。

②9月21日（火）信州大学 本間先生を本校にお迎えして、本校の担当職員と今年度の防災教育の方向について打ち合せ、ご指導をいただいた。この時、地区住民自治協議会職員（本校および豊野西小のコミュニティスクール運営委員を兼任）と豊野西小学校長も参加され、豊野地区全体の連携を意識した打合せとなった。この会で、以下の連携の実現が確認できた。

- (1)学校安全総合支援事業の活用による信州大学の本間先生（本校）、廣内先生（西小・豊野中）の連携について、大学内での先生方の組織が一つであることから、各校の指導者が違っても3校の連携について共通のご指導をいただける。
- (2)東京法令出版の教材「わが家の防災タイムライン（防災キット）」を今年度に豊野西小・豊野中学校が活用するということで、本校も導入し、小中間の連携を図る。信州大学の先生方も教材をご存知であり、防災教育について出版社とすでに連携があったため、豊野地区3校が同一教材を使っていくことが共通理解された。
- (3)本事業とは別に、本校では6年生を対象にした長野工業高等専門学校とNHK長野放送局が共催の防災教育授業の提案を受けて実施していただくことにしたが、信州大学の先生方・東京法令出版との連携がすでにされていることが共通理解された。

（長野高専による6年防災授業は、①10/28、②11/4に実施した）

- ③11月11日（木）信州大学 本間先生を本校にお迎えして、4～6年生各クラスで防災教育の授業をしていただいた（右写真）。子どもたちに水害・地震災害などの実際例を示し、ハザードマップの活用や避難警戒レベルごとの対応、「わが家の防災タイムライン」教材の中の「防災ガイドブック」を使って、タイムラインを作る大切さなどについて具体的に話ををしていただいた。この日は東京法令出版の担当者も来校し参観された。また職員研修として、防災教育のご指導をいただいた。特にNHK「そなえる防災」や長野市の行政地図情報、「東京備蓄ナビ」、兵庫県こころのケアセンター「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き」などの参考となるWebページや信州防災アプリなどを紹介していただいた。



（2）子ども一人ひとり「わが家の防災タイムライン」の作成

11月～12月に、4～6年生が「わが家の防災タイムライン」教材を活用して、実際に自分の家で災害に遭った場合のタイムラインを作る学習活動をした。作り方について担任が指導し、家庭に持ち帰って家族と相談しながら作成した（右写真）。想定される被害が家ごとに異なるので、家庭ごとに水害・地震など場面を想定してもらつた。子どもが家族と作成したタイムラインには、



気象情報や河川の水位情報や避難情報の収集・非常用持ち出し袋の確認・家の周囲の物の片付けや点検・避難情報の確認・電源ブレーカーやガス元栓や窓など戸締まりの確認・どのレベルで避難を開始するか・避難した後の連絡相手や方法など、項目ごとに時系列で配置され、家族の分担が明確に示されていた。一方で、十分に具体的とは言えない作成例もあった。

(3) 豊野地区3校および地区住民自治協議会との連携

①豊野地区3校の校長会・教頭会・教務主任会（防災担当）で次の連携が確認された。

(1) 3校ともに信州大学の学校防災アドバイザーのご指導を受けながら防災教育を進めしていく。

(2) 小中9年間を見通した防災教育カリキュラムを令和4年度に構築し、共通した指導ができるようにする。特に地域の特性を生かした小中連携の「児童生徒引き渡し訓練」を同一日に実施する方向で立案・調整をする。

(3) 東京法令出版「わが家の防災タイムライン」教材を小学校4年生から使用し、タイムラインを毎年作成（更新）して、小・中学校で共通した指導に活用する。

②地区住民自治協議会職員が本校のコミュニティスクール運営委員であることの良さを活かし、学校防災アドバイザーとの打合せから参加していただいた。学校防災アドバイザーは、地域連携の点でも住民自治協議会職員の参加は大変ありがたいということであった。さらに、住民自治協議会職員が豊野西小学校のコミュニティスクール運営委員でもあることの良さを活かし、学校間および地域全体の防災対策とも連携を図れるように関わっていただく。

3 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

①令和元年の台風19号被害をきっかけに水害に対する備えに地域を挙げて関心が高まっていた中で、学校防災アドバイザーホンダ喜子先生のご指導を受けながら、本校の子どもたちおよび職員に防災についての知識・理解を図っていただけたことは大変ありがたかった。子どもたちが一人ひとり防災タイムラインを作成できたことで、実践力につながっていく第一歩を踏み出せたと考えている。

②昨年より検討が始まっていた豊野地区3校間や地域との連携について、学校防災アドバイザーのご指導のもとに地区住民自治協議会にも参加していただきながら、共通の教材を活用したり、教務主任会で方向が共通理解されたりするなど、意識も体制もより確かなものになりつつあることがありがたい。特に令和4年度に向けて、カリキュラムづくりや3校が連携した引き渡し訓練などへの見通しが持ててきている点は、今年度の大きな成果と考えている。

(2) 今後の課題

①来年度の課題として、今年度に子どもたちが作成した防災タイムラインをより確かな

ものにするために、互いに見合つたり専門的な見地からご指導をいただきたりして、毎年更新し、その家庭ごとにより良いものを作成していくと良い。

②今年度、見通しが持てつつある豊野3校連携の活動（共通カリキュラム・合同の引き渡し訓練など）が具体化され、実施されると良い。引き続き学校防災アドバイザーにご指導をいただき実現したい。

4　まとめ

令和元年10月の台風19号による大災害を教訓として、自校の防災体制や教育内容を再構築しようと、昨年度から本支援事業で信州大学の本間喜子先生からご指導をいただきてきた。特に今年度は本事業によるご指導を中心にして、豊野地区3校と地域、また東京法令出版とも連携が進み、今後に向けた具体的な防災教育と実践の方向が見通せたことが大きな成果であった。昨年同様に、児童の命や生活を守るという最も大切な点について、学校職員だけで考えるのではなく、専門家のご指導や地域との連携の必要性を改めて強く感じた。ご指導くださった本間先生に感謝を申し上げたい。また、きっかけとなった本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

（文責 教頭 橋澤 宏文）

学校安全総合支援事業の取り組みについて
～安全防災教育の充実に向けた取り組みと
豊野三校における連携について～

長野市立豊野西小学校

1 はじめに

本校は、今年度児童数は349名、各学年2クラスずつの規模である。学校の周りにはりんご畠やぶどう畠が広がり、春の芽吹きから順に、季節ごとに姿を変えていく果物の様子を、間近で見ることができる。特に北西側は丘陵地となっており、その斜面に広がるぶどう棚の間は、低学年の散歩コースとなっている。地域の方は、子どもたちの活動を温かく見守ってくださり、学習への協力もいとわず、可能な限り力を貸してください。

学校の南側は平らな土地が広がり、ベランダからは、しなの鉄道北しなの線や北陸新幹線が行きかう様子が見られる。両線の間には浅川が流れ、新幹線のさらに南側には、ゆつたりと千曲川が流れている。

普段は穏やかなこの千曲川は、令和元年10月の台風19号の大雨により水かさが増し、近隣の地区である穂保で堤防が決壊してしまった。その水は、新幹線の線路を超えて豊野地区までも押し寄せ、浅川を飲み込み、本校の学区を飲み込み、学校のすぐ前の道路まで押し寄せた。本校自体の実害はほぼなかったが、本校児童の約4分の1が被災し、学校の体育館や校庭、校舎内の教室も避難所となった。本年度には、自宅以外の場所から通学してくれる児童もなくなり、復旧が進んでいるように見える。ただし、この豊野地区は、水害とは切り離せない土地であり、子どもたちや各家庭の心情に配慮しつつも、これからも防災意識を高く持ち、自分の命を守る行動ができるようにしていくことは必須と言える。

2 長野市立豊野西小学校の防災体制について（概要）

安全防災管理面については、昨年度、本事業により、避難訓練への取り組みを見直すことができた。訓練が形骸化したものにならず、子どもにとどても職員にとどても、命を守る行動につながるものにするために、「計画の立て方」「環境設定の必要性」についてご指導いただいた。これらについては、昨年度の内に「毎年同じ訓練にならないように、3年間で様々な想定を体験できるようにする」ことが係内で検討され、教育計画に明記されるようになった。それにより、今年度から昨年度とはまた違った想定での訓練を行うことができている。さらに、様々な場面に合うことから、各学級での振り返りが大切にされるようになった。訓練が終わり、教室に戻った後、「静かにできた」「ハンカチで口と鼻を抑えられた」といった、できたかできなかつたかの振り返りではなく、自分の行動を振り返り、「こんな場合はどうするか」「この行動でよかつたか」など、考えることができるようになってきている。

また、休み時間に緊急事態になった時の集合場所には、これまで「集3」など漢字で書

かれたプレートが貼られていた。高学年児童や職員はいつでもその意味が分かるが、緊急事態になった時、低学年や気持ちが不安定になった児童にとっては、判断が難しくなる可能性もある。そこで、ユニバーサルデザインの考えをもとに、誰が見ても分かるように図が使われているものを隣に貼ることにした。これによって「地震の絵の貼ってあるところ」という言葉で、1年生にも伝えられるようになってきている。

このように改善されてきたこともあるが、今年度の課題は、「安全防災教育の充実」であると言える。自分の家が被災した児童が4分の1の人数いること、丸1年が経過してもなお、雨の日には「ドキドキする」と担任に話す児童がいることから、学校としても、安全防災教育として水害の話を子どもたちとしてもいいものかどうか、ためらう部分もあった。しかし、これまでも、また今後も、この豊野の地は水害とは切り離せない土地であることを考えると、正しい知識を持ち、自分でも判断のできる子を育てていくことが、豊野西小学校として、必要なのではないかと考えている。

また、豊野西小学校の児童は、豊野東小学校の児童と共に豊野中学校へ進学する。同じ豊野に暮らす児童生徒であるので、一貫性をもって安全防災教育の指導をしていくこと、また保護者の立場に立ってみると、災害が起きた時に小学校と中学校の対応が大きく違わないことも大切なことだと考える。学習面と共に、スムーズに児童生徒を保護者に引き渡すことができるような組織作りも課題と考えている。

3 学校防災アドバイザーの関わり

- ・今年度、本事業に参加させていただくに当たり次のようなことを考えた。

【安全防災教育に関して】

- ・授業実践の積み重ね
- ・カリキュラム作り

【豊野三校の連携に関して】

- ・統一したカリキュラム作り
- ・豊野三校で合同引き渡し訓練を行う方向での計画づくり

これらへのご指導、アドバイス等をいただくようなかかわりをお願いしたい。

- ・実際に、次のような取り組みを行った。

(1) 複数の学年で安全防災教育の授業実践

①信州大学 廣内大助先生からのアドバイス

- ・「わがやの防災タイムライン」（東京法令出版）を利用した授業実践のすすめ。
- ・家庭と連携を取りながらの実践。
- ・「ぼうさいまちがい
さがし きけんはつ
けん」を用いた授業
実践のすすめ。



グループごとに、仮の家族にな
って、誰が何をするのかタイム
ラインを考える。

②豊野地区住民自治協議会事務局の方のサポート

- ・豊野町のハザードマップを利用した授業実践のすすめ。



タブレットを使って、豊野町のハザードマップを開いてみよう。自分のうちの場所、分かるかな。

自分の家は、水害が発生したら浸水するエリアに入っている。

③長野市教育委員会指導主事による職員研修

- ・「わがやの防災タイムライン」の使い方について、職員が実際に使ってみる。



大雨が続いた時、まず何をすればいいかな。辛いけれど、経験を生かせる場所になるかもしれないな

④豊野三校共通の安全防災教育カリキュラムの作成に着手

(2) 豊野三校の連携

①教務主任会の役割

- ・各校で行っている避難訓練や使っている引き渡しカード等の情報共有
- ・安全防災教育の情報共有
- ・三校統一の安全防災教育カリキュラムの作成
- ・合同引き渡し訓練の計画

このカリキュラムが整うと、西小、東小の児童が中学に進学した時、同じ学習ができているという状態になり、学習の進め方がスムーズになる。学年に応じた学習ということも考えられるようになりそうだ。

②各校の安全防災教育の授業を見合う

- ・授業を行う際は、情報を共有し、参観し学び合う機会とする。

4 事業の成果及び今後の課題

【成果】

- ・実際に浸水被害を受けた子どもたちと共に、「自分の命を守るためにには、どうしたらいいのだろう」と考えることができるようになった。「被害に遭った」から「被害に遭ったことを生かす」段階に入ることができた。
- ・豊野三校が連携して安全防災教育に取り組めるようになってきた。特に小学校においては「わがやの防災タイムライン」を高学年で活用していくことを決められた。豊野に暮らす子どもたちが、確実に安全防災教育にかかわることができるようになった。
- ・タブレットが一人一台あったので、ハザードマップをじっくり見ることができた。自分のこととして学習をするためには、やはり自分の家や自分の通学路を題材に考えることは必要である。
- ・防災教育については、資料を紹介していただいたことが、授業を行うきっかけとなつた。まずやってみることで、次に何をすればよいか考えることができる。

【課題】

- ・カリキュラムの完成と共に、学年に応じた学習内容の選定を行っていく必要がある。
- 授業実践の積み重ねを地道に行う。
- ・地域との連携の取り方

5 まとめ

積極的に学習環境を整えたり、「生かす」という立場に立つことができたりしたことは、万が一の時に自分の命を守ることができる児童を育てることにつながっていると考える。子どもたちに十分な力をつけていくことも減災につながると考える。被災した児童がいることはきちんと頭に入れながら、安全防災教育を進めていきたい。

(文責 教頭 藤澤 直子)